HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内村鑑三の聖書論
Author(s)	ラフェイ, ミッシェル
Citation	基督教学, 33, 1-19
Issue Date	1998-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46598
Type	journal article
File Information	33_1-19.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　文

内村鑑三の聖書論

ミッシェル・ラフェイ

はじめに

聖書が持つ意義やその力を研究する場合、その方法の一つとして、聖書に強く影響を受けながら生きた人物の言行の追跡を通してこれらを明らかにせんと試みることは可能であろう。聖書は、人間による人間のための書物であって、実際に人がその目で読んで初めて意味を持ってくると思われる。こういった視座から、ある人物を選び、その人物の個人的な背景と経験を通して聖書を眺め、教典としての聖書の持ち得る多様な可能性を探ることが、本論文の根本的意図である。もちろんこのような研究方法は、一般的な聖書学理論にはなり得ないであろうが、一般的な理論では汲み尽くせないものを拾い上げることもできるのではないであろうか。そのために、本論文では、近代日本における独創的なキリスト教思想家であった内村鑑三を取り上げ、彼の「聖書論」を再構成してみることとする。内村の著作に「聖書論」はない。聖書論とは、聖書解釈でも聖書注解でもなく、「聖書」そのものについての「論」である。本稿では、内村自身も意識していなかったであろう、彼の聖書に対する独特の関わり方を探ってゆきたい。人間内村と彼の時代および彼の生き方を聖書と関わらせながら、内村の聖書論を明らかにしてゆくつもりである。

一

聖書を読む場合に、聖書が書かれた時代の状況を知ることによってさらなる理解が得られるように、歴史的な人物を研究するにも、その時代の状況というものを考慮に入れる必要がある。内村鑑三の聖書論を研究するには、彼の思想を知るだけでなく、彼が生きていた時代をも知ることが重要である。明治という時代においては、日本社会のすべての領域で近代社会に向かう新しい道が模索されていた。それは、人間の基本的な生き方に関しても同様であった。しかし人間は、外的な押しつけによって自分の生き方が変えられてゆくことには不安を抱く。近代日本の人々特に知識階級の人々は、外圧によるこうした不安を感じており、その不安のただ中にあって自分を導いてくれるようなものを求めていた。新しい生き方の獲得は、不安からの解放をもたらし得る。内村はこのような歴史的状況の中で成長していったのである。彼は自然科学を学ぶことで、知識的なレベルでの支えを得たが、札幌農学校に入学したことによって、同時にキリスト教徒になる道を示された。しかし内村は、決して前述のような不安を癒すためにキリスト教徒になったわけではなく、最初はキリスト教徒になることに強い抵抗を覚えており、結局周囲の学生の圧力によってキリスト教徒にならざるを得なかったのである。彼の場合、不安はむしろそこから始まったと言える。その日から内村は、自らのうちに新しい生き方を形成していかざるを得なくなった。そしてその生き方は、一生涯にわたって彼の全人格を支えるものでなければならなかったのである。

内村は十六歳でキリスト教徒となったが、回心前の内村にとっては、聖書は異教の書物であった。内村にとって聖書がただの書物から教典へと変わってゆく過程を考えてみたい。回心という体験が宗教的人間の一生における大きな変化であることは言うまでもない。しかしその様相は人によって異なる。一度きりの決定的な回心がある一方で、徐々に進む回心や、堕落へ導く回心もある。内村は自分の回心について、"Though moments of ecstasy and sudden

spiritual illuminations were not wanting, my conversion was a slow gradual process" と書いている。[1] その回心の「過程」(process) において、彼の聖書に対する見方も徐々に変わってきた。内村の所有した最初の聖書は、札幌農学校で受け取ったものであると思われるが、それがまた彼の読んだ最初の聖書でもあったと考えられる。[2] 内村は東京外国語学校（のち東京英語学校、東京大学予備門）[3] 在学中、日曜日になるとよく友人と一緒に外国人街の教会へ「見物」(sight-seeing) に行った。[4] キリスト教の音楽と聖書の話を楽しむことが彼らの目的であった。内村は聖書の話のいくつかをそこで聞き知ったのではないかと思われる。それにしても十六歳の日本人の少年に、聖書とその教えはどのような印象を与えたであろうか。西洋人にとっては、聖書はある程度なじみのある書物であるから、その内容にも別に違和感はないが、内村にとっては明らかに異教の書物である。聖書の中の話を聞くのが面白く感じられても、それは聖書全体を受け入れるのとは全く異なることである。"Christianity was an enjoyable thing to me so long as I was not asked to accept it. Its music, its stories, the kindness shown me by its followers, pleased me immensely. But five years after, when it was formally presented to me to accept it, with certain stringent laws to keep and much sacrifice to make, my whole nature revolted against submitting myself to such a course"。[5] 彼はその時キリスト教を外から見ており、自分でもそれを「見物」と呼んでいた。内村にとって聖書は、まだ単なる書物という意味しか持っていなかったのである。

ところが彼は、「イエスを信ずる者の誓約」に署名した日から、聖書を教典として認識し始めた。とは言っても、聖書に書かれていることを、その日からすぐに全て信じたというわけではない。*How I Became a Christian* では、内村と彼の友人である信徒たちが、よく聖書の理解や解釈で悩んだり、それが原因でけんかをしたりしたことが述べられている。ある時内村と彼の友人が、異教徒をキリスト教に回心させるための "debate" をすることになったが、その中で Paul（太田稲造）と Fred（藤田九三郎）がけんかを始め、結局 Paul は部屋から飛び出してしまった。その出来

事に関して、内村は次のように日記に記している。"We found out that we ourselves had more doubts than we could answer, and that perhaps the best way would be for us to solve them in our own hearts with the help from on high"[6]。答えられない問い、解決できない疑問、そして意見の違いが彼らの間にあったことは当然である。いわゆるキリスト教国で育てられても、同様のことは起こるのであるから、非キリスト教国に生まれた内村の場合にそれがあったとしても、別に不思議ではない。内村はおそらく聖書を何回も通読したと思われるが、すべてを自力で理解するのはもちろん無理であったため、常に注解書や解説書を参考にせざるを得なかった。これが内村の場合と西洋人一般の場合との相違点である。西洋人は子どもの頃から聖書の教えを聞いて育つので、まずそれを信じることから信仰が始まるのが一般的である。しかしながら内村は、十代後半から聖書を勉強または研究しはじめたから、彼にはたえず抵抗感があった。内村はまず「信じる」のではなく、依然として「疑い」が残るという立場からキリスト教徒になったのである。

キリスト教徒になるにあたり、内村は聖書そのものよりも、まずはキリスト教の基本的な教えの方に注目していたと考えられる[7]。内村が重視していたものには、例えば、唯一神論と祈禱における喜びとがある。思うに、初期における内村のキリスト教への態度は、二重の形態を取っていたのではないであろうか。一方において、内村のキリスト教に対する姿勢は素朴で心情的であり、基本的な教えと固く結びついていたと言える。しかし他方では、聖書に対する疑問が完全には消失することなく残っており、聖書に対する知的アプローチが強調されている。この二重の形態は、内村の生涯を通し、変わることはなかったように見える。ギャップが少しずつ小さくなりはしたものの、状況によってはどちらか一方が、その時々に応じて強く現れた。このギャップを埋めんとする試みとして重要なものの一つが、聖書と日本文化との調停である。内村にとって初め外国の教典であった聖書は、研究が進むにつれて、徐々に「日本の書」になってゆく[8]。彼は日本の思想と聖書の思想との共通点、あるいは、日本人とヘブライ人との共通点、といっ

たものに気づき始めていた。これは内村の聖書論を考える上で非常に重要である。彼の有名な言葉「二つのJ」(Jesus と Japan)がこの認識を表している。「二つのJ」は彼の著作の中で何回も現れてくるが、内村が編集した *Japan Christian Intelligencer* という英文月刊誌の中に、「二つのJ」についての短い文章がある。"I love two J's and no third; one is Jesus, and the other is Japan. I do not know which I love more, Jesus or Japan"[9]。この文章は一九二六(大正十五・昭和元)年に発表されたが、また一九二八(昭和三)年にも、日本語の文章で同じことが述べられている。「イエスと日本国、二つのJ、其内何れが貴きやと訊かれたならば、ドツチがドツチとも答へ得なかったのであります」[10]。だがこの精神は多年をかけて培われていったものであり、彼が最初からこのような姿勢を持ち得ていたわけではない。

内村は、自らがキリスト教徒となるまでは、キリスト教徒になるというのは日本を棄てることだと思い込んでおり、また、渡米するまでは、日本人であることに劣等感さえ抱いていた。しかし渡米後すぐに、幾つかの体験を通して「アメリカ＝キリスト教国」とのイメージは崩れる[11]。ここから内村の中での日本に対する評価は、徐々に高まりを見せてゆく。この経験なくして、内村が聖書とキリスト教を完全に受け入れ得たかどうかは疑問である。様々な経験を経ることによって、イエス・キリストに対する愛と日本に対する愛とが、彼の中で互いに支え合うように形成されていった[12]。内村は、彼なりの仕方で日本と聖書の融合に成功したのであろう。

二

「基督教とは何である乎」という短い文章に、内村は次のようなことを書いていた。「基督教は制度ではない、教会ではない、夫れは又信仰箇条ではない、教義ではない、神学ではない、夫れは又書物ではない、聖書ではない、キリストのことばでもない、……」[13]。聖書を大事にした内村がどうしてそのようなことを書いたのであろうか。キリスト教から聖書またはキリストの言葉を取り去って、どうしてキリスト教が成り立つのか。聖書はキリスト教にとって不要

なのであろうか。内村は決してそのようなことを考えていたわけではないであろう。逆に、彼にとって聖書は一番大切な書物であったし、さらに彼は一生涯をその研究のために捧げた。それならばどうして、一方ではキリスト教は聖書ではないということを主張しつつ、他方では聖書を一生懸命研究したのであろうか。この現象は一見不思議に見えるが、内村の著作をさらに深く読めば、これら二つの態度が矛盾していないことが明らかになる。

内村は牧師ではなかったし、宣教師でもなかったが、その活動によって日本にキリスト教を広めた人であった。彼は新聞や雑誌や研究会の場で、聖書を通してキリスト教を伝えた。その際に聖書はただの道具に過ぎなかったのか。もちろんそんなことはない。内村が聖書に関する知識を持っていただけでなく、聖書に対して深い尊敬の念を抱いていたことは、当時多くの人々の間で知られていた。ノルマンは一九五六年に、内村に関する調査を行なった。調査の目的は、内村が日本人にどのような影響を与えたかを知ることであり、そのためにノルマンは、八教派の一五八〇人の牧師にはがきを出した[14]。その内七三九人から返答が得られた。調査にあたって三番目の質問は「内村鑑三に何を学ばれましたか」で、二二四人が「聖書に対する内村の尊敬、聖書についての知識と理解、聖書の権威」と答えている[15]。調査に答えた牧師たちは普通のプロテスタントの牧師で、もちろん無教会主義者ではないが、内村の聖書に対する考え方は彼らにとって非常に印象的だったようである。それでは内村の生涯において、聖書はどのような意味を持っていたのであろうか。そこでは、聖書がどのような役割を果たしたのであろうか。彼は聖書それ自体をどう思っていたのであろうか。

内村が通常の意味での神学的な聖書論を書かなかったのには、二つの理由があると思われる。一つは、彼が神学と神学者を高く評価していなかったからではないであろうか。この態度はおそらく札幌農学校とアメリカの体験の影響であろう[16]。彼の一生の著作の中には、組織的な神学的論文はほとんどない。彼は神学者に間違えられるのを恐れたのではないかとの推察も可能であろう。しかしもう一つ、神学的な聖書論を書かなかった理由として考えられることが

ある。それは、内村の書き方が、整理された論文というよりもインスピレーションによって書かれたエッセイという方がふさわしいからである。彼はジャーナリスト的精神をもって、現在起こりつつある出来事に関して、すぐに自分の印象や見解を表明しようとした。その精神が彼の文体および著作のジャンルにも影響を与えたように思われる。彼の著作には短編が多く、内容的には相互に矛盾しているところもある。それは、頭に思い浮かんだことをいち早く活字にしたかったためと考えてよいであろう。

内村は小さいころから書物に囲まれていたと思われる。彼の父は儒教の学者で、その初期教育は儒教的であった[17]。そのため書物は内村にとって非常に大切なものであったに違いない。当時書物は今日のように大量に出版されておらず、簡単に手に入るものではなかった。そのため書物は宝物だという考え方がかなり一般的であったと考えられる。内村自身も「聖書研究の話」の中で次のように書いている。「先づ第一に此世に於て何が最も貴いかと申しまするに、それは書物であるといふ事は誰れも承認する処であると思ひます[18]」。したがって、内村にとって聖書はまず最初の段階では「書物」であり、それなるがゆえに大切なものであった。その聖書がやがて彼にとって「教典」になるわけであるから、「内村鑑三の聖書論」を明らかにするという本稿の課題は、たとえ彼が神学な聖書論を書き残したとしても、それをとりあげるだけでつくされるわけではない。

それでは、聖書そのものの意味は、内村にとってどのように変化していったのであろうか。内村は「聖書の話」の中で次のように述べている。「是を聖書と申しますのは其中に神の聖旨が書いてあるからです[19]」。「神の聖旨を人の手を以て写したもの、是が聖書であります[20]」。「聖書は神の心を伝へた書であります[21]」。これらを見る限り、内村は、聖書は神という存在者の感情や意志や命令が書かれた書物であると考えているようである。キリスト教徒にとっては、聖書はそれだけで他の書物に優るものとなるであろう。内村もまたこの点では同様であるが、その一方で彼は、他の書物にも神の聖旨が入っている可能性はあるとし、ダーウィンや孔子の著作をその例としてあげている[22]。

内村は、聖書は神の言葉であるが、決して一方通行的なものではない、とする。聖書は神と人間との間のコミュニケーションの場と解される。内村は、聖書は「実験の書」であり、「精神の書」であると書く[23]。自らの実験を通して聖書の精神にあずかるのでなければ、人間が神を理解することはできない、と内村は考えていたようである。互いに共通点が一切なければ、コミュニケーションは成立しない。そこで神は、人間とのコミュニケーションを可能にするために、人間の手を以て聖書を作成させたのである。しかし内村は、そこに内包されている福音を掘り出す前の聖書は、ただの紙とインキ、または単なる文字にすぎないことも強調する[24]。

ここで逐語霊感説（doctrine of verbal inspiration）と内村との関係に触れておかねばならない。逐語霊感説とは簡単に言うと、聖書は全て霊感をもって書き記された神の言葉であり、そこに間違いはありえないとする説である。逐語霊感説を唱える人々は、今日ではファンダメンタリズム系の保守的な宗派に属する。内村はファンダメンタリズムを退けるが、それとともにリベラリズムに通ずるようなヒューマニスティックな考え方をも退ける。ファンダメンタリズムとリベラリズムには、聖書を自らの都合に合わせて部分的に使用するという共通点があり、彼は、これらの立場のいずれにも賛成しなかった。どちらかの立場を取れば、聖書解釈は簡単になり、自らの立場も安定したであろうが、彼はこれらをともに批判してゆく道を選んだのである[25]。

内村はファンダメンタリズムとリベラリズムの間に立って、自分自身の立場を確立しようとした。彼は知識人としての自らの位置をある程度は意識しており、聖書における言語の研究、科学的な研究を強調する。すなわち彼は、聖書の原文も英訳も和訳も読んだ上で、そこからさらに注解書を参考として聖書を解釈するよう主張しており、彼自身の内でも「内村風」解釈がそれなりに成立していた。内村の聖書研究は、多くの教派の注解を参考にしながら自分の意見を提示する形を取る。北海道大学に残されている内村鑑三文庫の目録を見れば、彼の使用した注解書の傾向は明らかになるが、全体として敬虔主義の影響が強かったと言えるであろう。彼は、ある程度の選り好みはあったにせよ、

様々な教派や教会による聖書注解書を読み、それらの差異を踏まえた上で自らの立場を築き上げてゆく。

聖書は読み方によってその意味が異なってくるわけであるが、内村はどんな読み方をするべきだと考えたのであろうか。彼によれば、聖書を読む時には「敬虔の念」が必要とされる。[26] また聖書は、人間の生き方を求める人々の書いた書であるから、私たちも求道的に読まなければならない。聖書を読むには、まず最初にそれに適った正しい心がけをもつことが必要とされ、実際に聖書を読むのはそれからである。つまり、聖書の読み方は心から始まるわけである。次に、聖書を読むのに欠くことのできない知識の獲得が要請される。第一に大切なのは、聖書の構成を知ることである。そのため内村は常に聖書を旧約と新約に分け、旧約は三十九書、新約は二十七書で、全部で六十六書になるということ、すなわち、聖書は多様な文書の集成であるということを確認する。また、聖書の構成についての知識とともに、聖書の書かれた時代と民族についての知識も必要である。歴史的な知識なしに、聖書は理解できない。例えば「聖書の話」に、「キユビト」という尺度に関する記述が出てくる。内村は、この「キユビト」がどのぐらいの長さかが分からなければ、聖書に出てくる石垣等のサイズを想像することもできないと指摘する。[27]

しかし、この読み方は、聖書の「文字」を知的に読むことに過ぎない。聖書の「真髄」や「精神」を読み取るには、それだけではまだ十分でない。内村は次のように述べる。「それでありますから聖書をよむには我が心に聖書の理想を以て致さなければなりません」。[28] その「理想」とは何であろうか。例えば、ヤコブとエサウの話を挙げてみるならば、神はヤコブを愛しエサウを憎む。だが内村によれば、これは日本人の感覚とは正反対である。「胆力とか潔白とか云ふことを以て非常に貴い道徳のやうに思ふて居る日本人」にとっては、エサウの方がヤコブよりも優れて見える。ところが、ここでの「聖書の理想」は「神に頼る人」であり、この点からすると神に愛されるべきはヤコブなのである。内村はこの例をもって、聖書には、日本人の感覚だけで読むには解し難い部分があることを主張しようとしたのであろう。[29] 聖書の理想、ヘブライ人の理想を知らずに、聖書を正しく読むことはできない。内村の著作には、日本の道徳

と聖書の理想との間に関連を見出そうとする記述がしばしばあるが、これは、両者のギャップを埋めんとする努力の過程に他ならない。

内村は、聖書を正しく読むには、さらにもう一つ不可欠の要素があるとする。神は我々にその真理を直接語り聞かせるというのがそれである。[30] 彼のこの考え方には、クエーカー的・神秘主義的な認識が見られる。クエーカーにも聖書以外の啓示の存在、つまり神が直接人間に与える真理を認める考え方があるが、おそらく内村の認識はここから導出されたのであろう。[31] 彼は聖書理解において、啓示の存在を重視している。聖書に対しては、ある程度までは知識による理解が可能だが、神が与えてくれる「光明」が心の中になければ、何度読んでもその真理に到達することはできない。

三

内村の聖書観の大きな特徴は、聖書を「実験の書」として見ることである。彼はしばしば聖書と現実社会とを比較し、その結果に基づいて社会の問題点を指摘した。さらに人生についての幾つかの問いと答も聖書から引き出されると考えていた。この点から見ると、彼にとっての聖書は、「実例」による練習問題が多く載っている「参考書」のようなものとも言えよう。[32] 彼は一般的なレベルでは、出来事や経験を聖書の引用と結びつける形で持論を展開し、そこから社会や政治に対する判断を下す。[33] 内村は聖書に関する知識が豊富で、彼の論文の中では、様々な仕方で聖書が引用される。無数にあるそれらを全て取り上げることはできないが、彼の引用の仕方がどのような広がりを持っているのかを概観してみたい。引用にはまず、実際の出来事や彼の経験に関係するものがかなりある。彼はそうした出来事や経験を聖書の記述と結びつけるような形で、自らの意見を述べる。内村は聖書に書いてあることを「律法」＝道徳のようなものとして実際の出来事に適用し、判断を下すのである。その判断はしばしば時局に対する警告となった。それ

は単なる悪口ではなく、日本やアメリカに対する批判も、それらを愛するがゆえの批判であった。このような批判の仕方は彼の神観念に基づいている。彼は神を愛の神であると考え、その愛は正義という形をとる愛であると主張した。内村の神は愛するものに厳しい態度を取るが、それと同じく内村も、愛した国や国民に対して厳しい態度で臨んだのである。

また彼の著作には、彼の個人的経験と関わるような聖書の箇所の引用がかなりある。内村の著書の中でその傾向がよく現れているのは、彼の最初の聖書注解書『貞操美談路得記』である。[34] そこで内村は、現代日本の女性には貞操と姑に対するつとめが欠けていると主張し、ルツ記こそ「聖書の女大学」であるとする。[35] 内村の言葉を借りれば、「聖書の理想的婦人は従順の婦人なり、即ち権利を争はざる婦人なり」となる。[36] この点に関する内村の記述が詳しいのは、おそらく自分の母と浅田タケとの関係が念頭にあったからであろう。[37] 彼は、姑と嫁との間に問題が起こる原因を、「嫗たるもの、我儘」と「姑たるもの、心得違」に見ているが、[38]「嫗たるもの、我儘」には、「(殊に近世に於ては)」という説明が付記されている。[39] これは、内村の発言が現代社会一般の風潮に対する批判であることを示しているが、個人レベルでは、やはりタケのことを指しているのではないであろうか。家庭内における女性のあり方をめぐる内村の批判は、社会レベルでは、当時における一つの見解として通用する。しかし聖書の教えは、彼個人にとってさらに複雑な感情を引き起こす。

ルツ記に示された精神、出エジプト記20章12節の「あなたの父と母を敬え」という戒め、そして孔子の説く父母への義務――これら三つはほぼ同じ意味内容である。しかし他方、創世記2章24節には、「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(新共同訳)とあり、この箇所と先の三例とは必ずしも一致しない。少なくとも内村にはそのように見えた。聖書内でのこうした相互矛盾は彼を苦しめた。彼は創世記2章24節をしばしば、「人ソノ父母ヲ捨テテ其妻ニスガレ」という意味に理解しており、この相互矛盾はますます大きくなる。

結果として内村は、東洋的道徳とルツ記や十戒における教えとを受け入れ、妻よりも母を選んだ。だがこの選択は彼を長く苦しませたようである。決断に際し、東洋の教えと聖書の教えとのどちらの影響が強かったのかは不明だが、聖書中の一方の章句を切り捨て他方の章句を選んだという事実は、聖書を矛盾なく理解しようとする彼の基本的な姿勢とはやや異なるものであったに違いない。この事実においては、聖書と現実とが対立した。ここでは、「実験の書」という聖書の性格が重要な役割を果たしたのではないであろうか。現実は聖書どおりには進まなかった。この決断の成否やその後の内村への影響はともかく、彼はこの状況下で、一つの「実験」をしたわけである。

なぜ内村は聖書を「実験の書」と呼んだのであろうか。彼はキリスト信徒であると同時に「自然科学の子」であった。札幌農学校において、内村は農学とキリスト教を同時に学び、彼の科学的知識と信仰は同時進行的に育まれていった。とすれば、彼の人格全体において、信仰と科学的知識が同じような相を見せたとしても、不思議ではないであろう。彼の意識の中では、科学における実験という方法が、信仰にも適用されていったのではないであろうか。内村自身この点についてはっきりと述べている――「科学の方法は亦宗教の方法である、信仰は実験である、科学と宗教との異なる点は其方法精神に於て在らずして、単に其探究の領域に於て在る」[40]。しかし内村の言う宗教の「実験」と科学の実験とは当然異なるものだったに違いない。宗教の「実験」では、まず初めに信仰がある。信仰は仮説を証明した結果確立されるものではなく、人間がそれに基づいて自らの価値観や感情を現実の場と照合することによって次第に現われてくるものである。宗教における「実験」はそのような意味に理解されるべきであろう。

周知の如く内村は、「真理の証人」として「天然」・「聖書」・「人間」の三者をあげているが[41]、これらはそれぞれ「実験の場」としての可能性を備えていると言えよう。彼が「天然」を愛し、大切にしたことはよく知られている。「天然」とはつまり自然科学の実験の場であり、「実験」という言葉も馴染みやすい。しかし彼にとっての「天然」はそれ以上の意味をも持っており、そこでは、人間や歴史を包含する一種の調和がイメージされていたようにも思われる。それ

に対して「人間」は、おそらく人間と歴史の全体を意味するものであろう。そして「聖書」は、「天然」と「人間」の両者を具体的に描き出す。教会を持たず、教会の儀礼に参加しない内村は、具体的現実と折衝するための手がかりを「聖書」から直接導き出そうとした。つまり、彼にとっては、聖書そのものが「実験の場」と重なり合ったのである。

キリスト教では普通、教会が媒介となって、神と人間との間を取り持つが、内村は自らの教会を持たなかったため、既存の教会制度における共同体を現実との接点にするわけにはいかなかった。したがって彼は、自分をとりまく社会的現実の諸問題を信仰に照らして考える「実験の場」のイメージを、聖書それ自体に求めざるを得なかった。聖書に記された物語や歴史が、信仰と現実との関わりを示す具体例として、内村自身における「実験」を要請しているように見えたのである。それを通して彼は、イエス・キリストとの直接的な個人的関係を造り上げていった。彼にとって「実験」とは、この関係を確認していく過程となるわけである。

換言すれば、内村の言う「実験」とは、イエス・キリストと同じように様々な苦難を体験することである――「基督を充分に解するには基督のやうに苦しみ、彼のやうに国人や朋友や兄弟にまで捨てられ、終には盗賊と共に十字架にまで釘けられるやうな辛らい実験を経なければなりません」[42]。もちろん内村は、全ての人が文字どおりの苦難を体験すべきだと言っているわけではないが、心の中で深く苦難を知ることの重要性を感じていたのであろう。彼は聖書について、「心に深き人世の実験を経し人に取ては至て解し易い書であります」と説明している[43]。人間はそれぞれの体験を経て、心の中に色々な感情を蓄積してから、初めて真の聖書を理解できるのである。自ら愛を感じたことのない人は、当然神の愛を理解することができない。各人の体験という「実験」を踏まえて、神は聖書をもって人の心に真理を伝えるのである[44]。神はひとり子を賜うほどに世の人を愛したという聖書の言葉（ヨハネによる福音書3章16節）は、そのような「実験」を経て理解できるようになる。

内村はその生涯にわたり、様々な不幸・苦難を体験した。アメリカ滞在中には、ヨブ記や預言書から慰めや喜びを

得ている。[45] その喜びは、彼が異文化の中に生きる人間と結びつき得るような一つの絆を見つけたことによるのではないであろうか。おそらく彼はこの時、聖書の「普遍的性格」、つまり、それが人間共通の基本的な体験や感情に根ざしているという事実を発見したと考えたのであろう。

おわりに

以上の論述によって、内村の聖書論とそれが形成される過程は明らかにできたのではないであろうか。その大きな特徴は、聖書を「実験の書」として見ることであった。この場合の「実験」とは、実際には現実の様々な社会的・政治的・宗教的な要因と内村の信仰がぶつかり合って摩擦が生じることである。そのような状態の中で彼は、前述のように、聖書の目ざす方向と彼が考えたことに従って行動しようと試みる。それは彼自身の「生き方」・「生きる姿勢」(way of life) の探求につながっていった。内村は聖書を単に道徳的に解釈することを避けようとしていたと思われるので、この "way of life" は必ずしも道徳と結びつかない。彼にとっては、まず何よりも聖書と自分の信仰が問題であり、それを踏まえて現実の諸関係を生き抜こうとしていたのではないかと思われる。古い価値基準が崩壊し、新しい価値基準が求められていた当時の日本の社会状況にあって、彼は意図せずしてその一つの可能性を提示することになった。そしてそれが、狭い意味でのキリスト教界を越えて、ある程度の共感者を見出すことによって、日本社会に対する内村の影響力が形作られていったのである。

内村が近代日本社会に対して示唆した新しい「生き方」は、彼自身においては、イエス・キリストとの個人的な関係を基礎としていたために、単なる道徳とはならなかったが、それが日本社会に移植された際には、彼とイエス・キリストとのこの関係が抜け落ちたために、新しい道徳のようなものとして受け取られたのである。それでは内村にとって、イエス・キリストとの個人的な関係 (personal relationship with Christ) とはどのようなものであったのであろ

うか。彼の場合、イエス・キリストが史的な人間イエスを指しているのではないことは明らかである。彼の多くの著作には「生けるキリスト」という言葉が現われる[46]。生けるキリストでなければ、人間と真に個人的な関係を結ぶことは不可能である。確かに史的なイエスも内村にとって重要であったが、彼にとって本当になくてはならなかったのは、むしろ十字架上のイエスとのちに復活したキリストであったと思われる。十字架と復活のイエス・キリストこそ、内村にとってキリスト教の必要条件であった。そのため彼は、キリスト教という名に換えて“crucifixianity”＝「十字架教」にするべきであると主張する[47]。また別な著作では“Christianty without Christ is an impossibility”とも述べている[48]。

聖書は古来様々な人によって、様々な意味で理解されてきた。すなわち、外国の書、書物、教典、神の言葉、キリスト教の基礎、キリスト教の全てなどである。聖書が全ての人々にとって全ての意味になるということはあり得ないであろう。内村にとって聖書が重要な意味を持っていたことは明らかであるが、その意味は、普通の教会に通う信者とは異なったものであったと思われる。しかし、自然科学の実験が自然界の普遍的真理を検証するように、聖書をめぐる内村の「実験」も、彼を一種の普遍性へと導いていったのではないであろうか。それは聖書に基づく普遍性である。最終的にはこの普遍性が内村の信仰を支えたのではないであろうか。端的に言えば、聖書に基づく普遍性は、聖書が終始人間に関わるものであることから生じる。それによって彼は、日本の文化とキリスト教および聖書との間のギャップを埋めることができたのではないかと思われる。キリスト教徒になりたくなかった内村から、キリスト教と聖書を自らの「生き方」の根拠として受け入れた内村までの旅は長く、その間にはさまざまな問題があったが、彼はそれらを乗り越えて、遂にその普遍性に出会ったのである。

註

(1) 内村鑑三 *How I Became a Christian: Out of My Diary*、『全集』三、五頁。内村鑑三著、松沢弘陽訳「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」『日本の名著』三十八巻、中央公論社、一九七一年、八一頁。

(2) 佐波亘編『植村正久と其の時代』第1巻、教文館、一九六六年、五五十頁。

(3) 鈴木範久編「年譜」『全集』40、岩波書店、一九八四年、四〇八頁。

(4) 内村鑑三、前掲書 『全集』三、一三頁、松沢弘陽訳、八九頁。

(5) 同書、一三―一四頁、松沢弘陽訳、八九頁。

(6) 同書、三六頁、松沢弘陽訳、一〇八頁。

(7) 同書、一三―一四頁、松沢弘陽訳、九三―九四頁。

(8) 同「日本に於ける聖書の研究」『全集』二二、岩波書店、一九八二年、三七八頁。

(9) 同 "Two J's"『全集』三〇、岩波書店、一九八二年、五三頁。

(10) 同「故横井時雄君の為に弁ず」『全集』三一、岩波書店、一九八三年、一五四頁。

(11) 同 *How I Became a Christian: Out of My Diary*、『全集』三、八一頁、松沢弘陽訳、一四五頁。

(12) 同 "Two J's"『全集』三〇、岩波書店、一九八二年、五三頁。

(13) 同「基督教とは何んである乎」『全集』二一、岩波書店、一九八二年、三六―三七頁（傍線部は筆者）。

(14) W.H.H. Norman, "An Interim Report on Mukyokaishugi Today", in: *Kwansei Gakuin University Annual Studies*, vol. 6, 1958, p. 6.

(15) *ibid.*, p. 7-8.

(16) 内村鑑三 *How I Became a Christian: Out of My Diary*,『全集』三、一三一―一三二頁、松沢弘陽訳、一九三―四頁。一三三頁、松沢弘陽訳、一九五頁。

(17) 同書、九頁、松沢弘陽訳、八六頁。

(18) 同「聖書研究の話」『全集』一八、岩波書店、一九八一年、二一二頁。

(19) 同「聖書の話」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、二一九〇頁。
(20) 同書、二九一頁。
(21) 同書、同頁。
(22) 同書、二九〇頁。
(23) 同「聖書の話」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、二九八―三〇二頁。
(24) 同「聖書は如何なる意味に於て神の言辞なる耶」『全集』一〇、岩波書店、一九八一年、一四七頁。
(25) 同 "The Humorless People"『全集』三一、岩波書店、一九八三年、九頁。
同「聖書の話」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、二九一頁。同「聖書の研究と社会改良」『全集』一〇、岩波書店、一九八一年、一〇三頁。
(26) 同「宗教座談」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、一三八頁。
(27) 同書、二九五頁。
(28) 同「聖書の話」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、二九二、三〇二頁。
(29) 同書、三〇二―三〇三頁。
(30) 同「宗教座談」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、一三九頁。
(31) 佐藤全弘『希望のありか――内村鑑三と現代――』(第5章「内村鑑三とクエーカー」)教文館、一九九一年、二二〇頁。
(32) この解釈の仕方はファンダメンタリズムの特徴に通じるようにも見える。英語で言うところの、"comparing scripture with scripture" である。しかしこれによって直ちに内村がファンダメンタリストであるとは言えないであろう。
(33) 鈴木範久『内村鑑三日録1907―1908ジャーナリスト時代』教文館、一九九四年、一〇二頁。内村鑑三 "Note and Comment"『全集』五、岩波書店、一九八一年、一三七頁。同 *How I Became a Christian: Out of My Diary*、『全集』三、八七―八八頁、松沢弘陽訳、一五二頁。
「ローマの信徒への手紙」三・二一には次のように記されている。「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました」(新共同訳)(傍線部は筆者)。内村の念頭にはおそらくこの章句があったので

あろう。

(34) 内村鑑三「貞操美談路得記」『全集』二、岩波書店、一九八〇年、二六一頁。

(35) 同書、同頁。

(36) 同書、二六三頁。

(37) 内村は一八八四年（明治十七年）三月二十八日に浅田タケと結婚式をあげたが、同年十月ごろタケは実家に帰り、彼らは別居することになった。正式離婚は一八八九年。鈴木範久編「年譜」『全集』四〇、岩波書店、一九八四年、四一〇―四一一頁参照。結婚する前から、内村の母はこれに強く反対しており、その理由は「賢すぎる、学問がありすぎる、知的すぎる」（一八八三年十月三十日付太田稲造宛書簡）というものであった。離婚の原因ははっきりしないが、「異性関係の疑惑」という説もある。鈴木範久『内村鑑三』岩波新書二八七、一九九二年、二五―二六頁参照。

(38) 内村鑑三「貞操美談路得記」『全集』二、岩波書店、一九八〇年、二七〇頁。

(39) 同書、同頁。

(40) 同「農学耶神学耶」『全集』一四、岩波書店、一九八一年、二九四頁。

(41) 同 "There are Three Witnesses to the Truth"『全集』四〇、岩波書店、一九八四年、三、三七七頁。内村はアメリカ滞在中、彼の古い聖書の見返しに次のようなことを書いた。"There are Three Witnesses to the Truth, viz. Nature, Man, and Bible. We cannot have the true Conception of one of three, without the correct understanding of the other two. They are the Trinity of one Eternal Knowledge the Trifold Manifestations of one Godhead April 18th 1885 Elwyn, Pa. U. S. A"。しかし、残念ながらこの聖書のありかは不明である。

(42) 同「聖書の話」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、二九九頁。

(43) 同書、二九八頁。

(44) 同「聖書の話」『全集』八、岩波書店、一九八〇年、二九八―二九九頁。

(45) 同 *How I Became a Christian: Out of My Diary*,『全集』三、一〇八頁、松沢弘陽訳、一七一頁。

(46) 同「活けるキリスト」『全集』一二、岩波書店、一九八一年、二〇一頁。

同「生けるキリスト」『全集』一二、岩波書店、一九八一年、三五五頁。同「聖書と活けるキリスト」『全集』一二、岩波

書店、一九八一年、四七六頁。

同「活けるキリスト」『全集』二〇、岩波書店、一九八三年、一〇八―一一〇頁。同「生けるキリスト」『全集』二〇、岩波書店、一九八三年、三七八―三八一頁。同「生けるキリスト」『全集』二一、岩波書店、一九八三年、一一九―一二一頁。

(47) 同 "Crucifixianity"「十字架教」『全集』二六、岩波書店、一九八二年、三―四頁。

(48) 同 "IS CHRISTIANITY PRACTICABLE?"「基督教は実行可能なる耶」『全集』二六、岩波書店、一九八二年、四六七―四六八頁。